



ラブレター



アルカリ

いきなりこんな手紙を受け取って、君は困惑していることだろうね。だが、許してほしい。私には伝えなければならないことがあるのだから。

君は私と初めて会ったときのことを覚えているかい？ しとすと雨が降っていたね。私は雨というものが大嫌いだったから、とても憂鬱だった。それに加えてあのR夫人に会わなければなかったからね。君もご存知のとおり、R夫人はあのよう傲慢な性格だ。口を開けば自分と家の自慢か他人の悪口ばかりであるし、常に他人を見下しているような話し方しかできない。いや、やめよう。R夫人の話をしたいわけではないのだから。

さて、あの日だが、私はとても不愉快だった。R夫人の家に行く道すがら、君に出会うそのときまで。

そう、雨に濡れているのにも拘らず、凜とした君のその立ち姿はまさに美しきアフロディテのようだった。しなやかなその肢体、濡れて鮮やかなその黒髪、そして悪戯好きのその金の瞳！ 雨がその美しさを損なうことを恐れて避けて降っているように、君の周りだけが生き生きと輝いていた。ああ、なんという美しい光景であったことか！

私が君に見とれていると、君は悪戯な微笑で逃げてしまったね。その後の私の悩みようといったら。君に心を奪われたせいでR夫人との約束をすっぽかしてしまったよ。

私は君が誰だかとても知りたかった。けれど、君の外見以外には手がかりが全くなかったから、君と再びまみえるまでのおそよ一週間、私はひどく無様な状態だったよ。普段そっけないトーマス——彼は私の親友なのだが——がとても優しくかったから、傍から見てもひどい姿だったのだろう。

偶然にもS嬢の家を訪ねることになったあの日、私はまたも不機嫌だった。なぜって君の素性もわからないままだったし、それにあのR夫人に約束をすっぽかした罰としてお使いを命じられたようなものだったから。

まさかS嬢のお宅で君と再会できるとは思わなかった！ 君がS嬢のところの娘さんだったとは。S嬢とは特別疎遠であったわけではないから、時折誘われるお茶会にでも積極的に参加すれば君ともっと早くに出会えたのだろうね。

再会した君は気高く微笑んで私に寄り添ってくれたね。その美しい黒髪に指を滑り込ませるのを君は目を細めて許してくれた。そのとき私がどれだけ嬉しかったことか！ 突然の再会に愛をささやく言葉を持ち合わせていなかったことが非常に悔やまれたよ。

けれど、時間は私たちの甘い逢瀬を長くは許してくれなかった。暇乞いをするときの苦悩を君に聞かせたいくらいだ。S嬢に別れを告げた後、君にさよならを言おうとしたら、もう同じ場所にはいなかったね。君は気まぐれだから、私のことなどただの遊びに変えてしまったのかと思ったよ。

私は君の虜になっているのを理解していただけたらだろうか。叶うなら君と結ばれたいんだ。私は君を愛しているのだよ、美しい黒髪のリースヒェン！ 君が雨の中、私に微笑みかけてくれたそのときから、私は君の、君だけの虜だ。どうかその気まぐれな微笑を私に！ そしてその悪戯

な金の瞳を私だけに！　どうか、リースヒェン。私の愛を受け取ってください。

気紛れな美しい貴女へ、リースヒェン。

貴女を心から愛するハンスより。

「おや、君が手紙とは珍しい」

「やあ、トーマス。実はだね、ラブレターを書いていたのさ」

「ラブレター！　君がかい？」

「なんだい、その驚きようは。私がラブレターを書いてはいけないみたいじゃないか」

「いやいや、失礼。しかし君が恋をしていたとはね、驚きだ。それで、君の恋慕のお相手はどなたかな？」

「それはだね、S嬢の……」

「S嬢！？　それはいけないよ、ハンス！　彼女にはフィアンセがいるじゃあないか。折角書いたのだろうけれど、そのラブレターはすぐに破り捨てるべきだ」

「違う！　違うよ、トーマス。話は最後まで聴いてくれ。私が愛するのはS嬢のところの気紛れなリースヒェンさ！」

「……リースヒェン？　おいおい、気は確かか、ハンス！」

「確かだとも。あれほどに美しく、人を魅了する女性にこれまで私は一度として会ったことが無い。私は彼女を一目見ただけで恋に落ちてしまったのだ。ああ、美しいリースヒェン。私は貴女のものだ！」

「確かに彼女が美しいのは認める。しかし、しかしだね、ハンス……」

「なんだい、彼女に文句を言うのだとしたら許さないよ。たとえ君でもね」

「いや、文句を言うつもりは無いが、しかし」

「しかし？」

「……彼女は猫だろう」